

最大規模のスケールで、 人間・岡本太郎を体感

絵画、立体、パブリックアートから生活用品まで、強烈なインパクトのある作品を次々と生み出し、日本万国博覧会(大阪万博)の核となる「太陽の塔」をプロデュースし、晩年は「芸術は爆発だ!」の流行語とともにお茶の間の人気者にもなった岡本太郎。彼は、戦後日本の芸術家としてもっとも高い人気と知名度を誇るひとりでありながら、あまりに多岐にわたる仕事ぶりから、その全貌を捉えることが難しい存在でもありました。「何が本職なのか?」と問われ、彼はこう答えます。「人間——全存在として猛烈に生きる人間」。18歳で渡ったパリの青春時代から、戦後、前衛芸術運動をけん引した壮年期の作品群、民族学的視点から失われつつある土着的な風景を求めた足跡や、大衆に向けた芸術精神の発信の数々、さらにアトリエで人知れず描き進めた晩年の絵画群まで——。本展は、常に未知なるものに向かって果敢に挑み続けた岡本太郎の人生の全貌を紹介する、過去最大規模の回顧展です。

Best known for Tower of the Sun, the centerpiece of the 1970 Japan World Exposition (Expo '70), Okamoto Taro was one of the most popular and widely recognized artists in postwar Japan. After spending his early adulthood in Paris, where he moved at the age of 18, Okamoto's mature work established him as a leading figure in Japan's postwar avant-garde movement. He subsequently adopted an ethnological perspective in his search for disappearing indigenous landscapes, and produced a host of works imbued with an artistic spirit designed to appeal to the masses. This exhibition, the largest retrospective ever assembled, examines the entire aspect of Okamoto Taro, an artist who constantly dared to challenge the unknown.



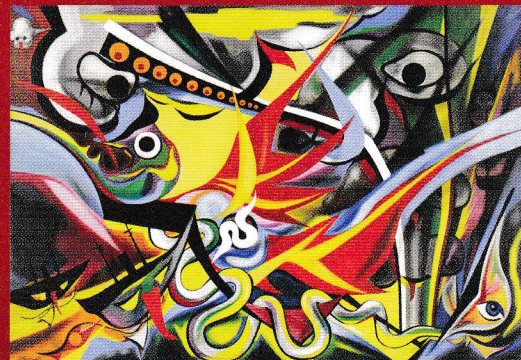
《太陽の塔》1970年 万博記念公園
大阪万博のテーマ館として建てられた。高さは70m。本展では1/50の作品を展示。



《傷ましき腕》1936年(1949年再制作) 川崎市岡本太郎美術館蔵
国際シュルレアリスム・パリ展に出品され、高く評価された作品。



《日の壁(旧東京都庁舎壁画原画)》1956年
岡本太郎記念館蔵
旧都庁舎の壁面を飾った巨大レリーフの原画。



《燃える人》1955年 東京国立近代美術館蔵
1954年のビキニ環礁の水爆実験で第五福竜丸が被爆した事件をもとに描かれた。



《愛撫》1964年 川崎市岡本太郎美術館蔵
岩手の民俗舞踊「鹿踊り」に着想を得たといわれる作品で、うねる線に呪術的なものへの岡本の関心が反映されている。



《明日の神話》1968年 川崎市岡本太郎美術館蔵
メキシコのホテルの為に制作された幅30mの巨大な壁画。長らく所在が不明となっていたが2003年に発見され、修復を経て2008年に渋谷駅に設置された。本展では幅約11mの下絵を展示。



《夜》1947年 川崎市岡本太郎美術館蔵
前衛芸術家らが集った「夜の会」の名称のもとになった作品。



《森の掟》1950年 川崎市岡本太郎美術館蔵
異質なものを画面に混在させた「対極主義」の代表作。



約40年ぶり、
ニューヨークから初里帰り!

《露店》1937年(1949年再制作) ソロモン・R・グッゲンハイム美術館蔵(ニューヨーク)